

[論文]

## 子どものメッセージの形態が受け手に与える影響の検討 —SD 法を用いたテキストの印象分析の結果から—

小湊 真衣  
青山(開田) 有希

### How the formation of child's message affect to the receiver? —Image analysis of text using SD method—

Mai Kominato  
Yuki Aoyama(Hirakida)

キーワード：子ども、メッセージの形態、印象分析、SD 法

Key Words：children, formation of message, image analysis, SD method

要約：昨今教育や保育の現場では、いじめや虐待、貧困などが深刻な問題となっているが、そこまで深刻なケースでなくとも、子どもは日々の生活の中で多かれ少なかれ様々な悩みを抱えたり、葛藤したりしている。子どもから大人に対し、悩みや葛藤に関するメッセージが発信される時、その形態は直接的な形態をとる場合と間接的な形態をとる場合があるが、どの場合でも大人がそのメッセージの発信者である子どもの心境や心情を必ずしも正しく理解できるとは限らない。そこで本調査では、将来子どもと接する職に就くことを目指して学修中の学生 133 名(男性 71 名,女性 57 名,不明 5 名;平均年齢 18.24 歳,SD=0.43)を対象とし、子どものメッセージの形態の違いによって、受け手が抱くイメージにどのような違いが生じるかを SD 法を用いて検討した。その結果、メッセージが手書きであった場合とデジタル化された文字であった場合とでは、いくつかの形容詞対で有意な差が見受けられ、メッセージの形態がメッセージに対するイメージの形成に影響を及ぼしている可能性が示唆された。ただし、手書きもしくはデジタル文字のどちらの形態の方がより子どもの心境や背景についてイメージできるのかという点に関しては、手書きの方がポジティブなイメージになることもあればデジタル文字の方がポジティブなイメージになることもあるなど、一概には言えないことも明らかとなった。また、子どもと接する機会の有無がメッセージの読み取りや、形成するイメージに影響を及ぼしているのではないかという仮説に関しては、今回の調査結果からは特に有意な差は見出されなかった。

## 1. 目的

昨今教育や保育の現場では、いじめや虐待、貧困などが深刻な問題となっているが、そこまで深刻なケースでなくとも、子どもは日々友達関係や家族関係などの中で多かれ少なかれ様々な悩みを抱えたり、葛藤したりしている。こうした悩みや葛藤は、子ども自身が自分で処理できるものもあれば、周りからの支援やサポートによって適切な処理が促されるものもある。子どもが抱える悩みや葛藤の存在に気づくきっかけとしては、子どもの周りにいる大人が子どもの様子からその問題の存在を察知する場合があるほか、子どもから大人に対して直接訴えがなされることがきっかけになる場合もある。子どもから大人に対し、悩みや葛藤に関する訴えもしくは告白がなされるとき、その形態は直接的な形態をとる場合と間接的な形態をとる場合がある。直接的な形態としては、例えば子どもが保育者や教師と直接対面し、口頭にてメッセージを伝えるなどの状況が考えられる。それに対し間接的な形態としては手紙や日記、メールなど、子どもがメッセージの受け手と直接顔を合わせない形で自身の状況や気持ちを伝達する状況が想定される。

しかし、子どもから発せられるメッセージが直接的であれ間接的であれ、大人がメッセージの発信者である子どもの心境や心情を必ずしも正しく理解できるとは限らない。まず、直接メッセージが発せられる場合を考えてみると、傷つきを抱えている子どもの中には家族以外の大人に対して口頭で面と向かって率直な表現で **SOS** を発信することができない場合も多い。また、発達心理学的側面から言えば、特に幼児期から学童期の子どもは外界の具体的事物に対して興味を抱きやすい反面、抽象的な思考や自分自身の内面を見つめることがまだ難しい発達段階にある上、語彙力や表現力にも拙さがあるため、特別な訓練を施されていない限り、己の精神的状態を適切な表現で正確に表現することが難しく、それが間接的なメッセージの伝達の妨げにもなり得ると考えられる。したがって、口頭以外の間接的な方法で発せられる子どもからのメッセージに対する感受性を磨き、子どもの気持ちを敏感に察知できるようになっておくことが、子どもと接する職に就くものにとって必要なことであると言える。もちろん、子どもから発せられる直接的ないし間接的なメッセージを待たずに、子どもの表情や普段の言動から、子どもの潜在的な不安や葛藤を推察する能力も重要ではあるが、潜在的なメッセージに気づく力を養うにあたっては、まずは顕在化したメッセージを正しく受け止める力が必要になる。

そこで本調査では、将来子どもと接する職に就くことを目指して学修中の学生を対象とし、子どものメッセージの形態の違いによって、抱くイメージにどのような違いが生じるかを **SD** 法を用いて検討することを目的とした。具体的には、同じメッセージ内容であっても、それが手書きであるかデジタル化された文字であるかによって、そのメッセージに対する印象にどのような相違があるかを検討する。メッセージの形態がその評価に与える影響に関して吉村(1991)は、小論文のような論理的な文章と手紙のような気持ちを伝える文章が、それぞれ手書きで書かれた場合とワープロ文字で書かれた場合とを比較し、ワ

ワープロ文字で書かれた手紙は「論理性」「内容の優劣」の面で高評価となる一方、手書きの手紙は「心がこもっている」「あたたかい」といった面で高評価となることを明らかにしている。また、論理的な文章においては手書きの文字が綺麗な場合、ワープロ文字の場合と内容の優劣に差が見受けられないものの、文字が汚かった場合は低い評価が下されることや(吉村,1992)、質の高い小論文の場合は特に汚い手書き文字に対して低評価が下されることから、文字の種類の違いは文章作成者の態度や能力の評価に影響を与える可能性を指摘している(吉村,1993a,1993b)。また、メッセージに対するイメージ以外では、筆跡と書き手のパーソナリティに関する研究などがこれまで行われてきている(黒田,1980;槇田・小谷津・伊藤・渡辺・平野,1981;槇田,1983)が、多くの人は書かれた文字から書き手の性格特性を読み取るものの、実際の書き手の性格と書き文字の特徴との対応は乏しいことも指摘されている(西園・無藤,1993)。こうしたことから、子どものメッセージが手書きである場合とデジタル文字である場合とでは、形成されるイメージに違いが生じるのではないかと考えられる。

また先行研究では子どもとの継続的な接触体験(佐々木ら,2010)や、体験教育等(長屋・小河,2015)が子どもに対する共感性を高める可能性が指摘されていることから、子どもと日常的に接する機会の有無によって、メッセージの読み取り方に違いが生じるか否かについても同時に検討を行うこととした。

## 2. 方法

### 調査協力者

関東圏の私立大学にて教職科目を履修している学生および私立短期大学にて保育者養成課程に在学中の学生いずれも1年生を対象とし、調査紙への回答を依頼した。調査への賛同が得られた協力者のうち回答に不備があったものを除外し、最終的に学生133名(男性71名,女性57名,不明5名)からの回答を得た。なお調査協力者の平均年齢は18.24歳( $SD=0.43$ )であった。

### 手続き

調査は2018年6月中旬から同月下旬にかけ、授業終了後の時間を利用して実施された。

### 調査内容

質問紙のタイトルは「手書き文字とデジタル文字に関する調査」とし、フェイスシートにて倫理的配慮に関する説明を記載した。研究趣旨への賛同と実験協力に対する意思の確認ができた調査者に対してのみ、性別・年齢および、日常的に子どもと触れ合う機会の有無を尋ねた。

提示刺激として、学童保育に通う小学生が学童保育での思い出を綴ったメッセージを6種類用意し、今回の調査ではそのうち3種類を分析の対象とした(表1.)。なお、刺激1は小学2年の男児、刺激2は小学2年の女児、刺激3は小学1年の女児によるものであつ

た。それぞれの刺激は、子どもの手書きのメッセージをそのまま掲載した「手書き」刺激と、子どもの手書きのメッセージをパソコンにて MS ゴシックの形態で文字起こしした「デジタル」刺激の 2 種類とした。なお文字起こしを行う際、誤字脱字や文法上の誤りは訂正せず、子どもが書いた文章や文字をそのままデジタル文字化した。今回、学童保育での思い出に関するメッセージを刺激として選定した理由は、これらの刺激には学童が終了することによる寂しさや悲しさと学童での楽しかった思い出・嫌な思い出などが同時に描写されており、読み手によって様々な読み取り方が可能であると考えられたためである。また、悲しみや怒りと言った負の感情のみで構成されているメッセージを提示した場合、調査協力者が精神的な負担を感じる可能性が考えられたため、今回は比較的ポジティブな内容のメッセージを刺激として選定した。

それぞれのメッセージに対して抱くイメージを測定するため、SD 法を用いて調査を行った。1957 年に Osgood らによって提案された SD 法 (Semantic Differential Technique: 意味差判別法) は、様々な対象や言葉に対する個人の心理的意味を測定するための方法であり、色や音、香りなど、個人が情緒的意味を感じる刺激は、すべて SD 法の概念として使用することが可能であるとされる。また、SD 法で扱われるイメージは、個々人が特定の対象・事態・概念に対して抱いている漠然とした印象全体を指すという点が特徴である。今回 SD 法で使用する形容詞対は項目の意味を明確にするために両極対とした。また形容詞対の選出にあたっては、子ども観やパーソナリティ認知等、人格を対象とする SD 法のイメージ測定でよく用いられている形容詞の中でも有効なものとして井上・小林 (1985) が挙げている形容詞対の中から、調査協力者の回答にかかる負担を考慮し、10 項目を調査者 2 名による協議によって選出した。ただし、そのうち「元気な-疲れた」や「新しい-古い」などは、それぞれ「元気な-沈んだ」「若い-老いた」とするなど、子どものメッセージに対するイメージを表す形容詞としてよりわかりやすい表現になるよう若干の変更を加えた。これら 10 対の形容詞対について、「4 どちらともいえない」を中央に置き、左側に「7 非常に」「6 かなり」「5 やや」、右側に「3 やや」「2 かなり」「1 非常に」を配置した 7 件法で、それぞれの刺激に対するイメージを尋ねた。なお、中央に「どちらともいえない」の選択肢を設置した理由としては、Vine (1974) が指摘しているように、評定者による筆跡を手がかりとした特性の見立ては実際のパーソナリティ特性と合致しない可能性もあるため、場合によっては安易な決めつけをせず、「この情報だけでは判断できない (どちらともいえない)」という判断を下すことも重要であると考えたためである。

質問紙の最後には、「このメッセージを書いた本人の心境について、何か伝わって来るものもしくは読み取れたことがあれば、その内容についてお答えください」という質問文を付し、それぞれのメッセージを書いた子どもの心境について自由記述式で回答を求めた。なお、心境について特に何も読み取れないと思った場合には「特に何も読み取れないと思う」という選択肢に丸をつけるよう求めた。ただし、本報告では手書きもしくはデジタル

のメッセージに対して形成されるイメージの差異に焦点を当てたため、自由記述の結果に関する分析は本報告では見送ることとした。

質問紙は「手書き」刺激に対するイメージを尋ねる「手書き」版と、「デジタル」刺激に対するイメージを尋ねる「デジタル」版の2種類を作成し、調査紙が2種類あることは調査協力者には伏せた上で、「手書き」版と「デジタル」版を調査協力者にランダムに配布し、回収した。有効回答 133 部のうち、手書き版への回答は 58 部、デジタル版への回答は 75 部であった。

表 1. 質問紙で提示した刺激

<p style="text-align: center;">＜刺激 1＞</p> <p style="text-align: center;">友だちと、あそんで、楽しかった。理ゆうは、校でいでも、あそべてたのしいからです。</p>
<p style="text-align: center;">＜刺激 2＞</p> <p style="text-align: center;">楽しくて春休み夏休みあついてもさむくてもみんなとあそんだりできてとてもうれしかったです。学どうで友だちがたくさんできてよかったです。しどういんともあそべてよかったです。</p>
<p style="text-align: center;">＜刺激 3＞</p> <p style="text-align: center;">1年生から6年生までなかよくあそんでくれたのしかったです。1年生とけんかしちゃったのもやかったです。けどもだちがいるおかげでいろいろたすけてもらうからです。</p>

### 倫理的配慮

本調査では以下の倫理的配慮を行った。まず質問紙のフェイスシートに、回答内容は統計的に処理し、回答内容に関して個人が特定されることはないこと、回答済みの質問紙は適切に保管すること、データの入力分析が終了し次第質問紙は適切に処分することを明記し、質問紙を配布する際に口頭でもその内容を説明した上で、調査への参加は任意であり、授業における成績とは一切関係がなく、協力しなかったからといって学業上の不利益は生じないことを改めて調査協力者に伝えた。

メッセージの提供者である子どもとその保護者および学童関係者には研究協力についての同意を得、本論文ではプライバシー保護の観点から子どもの氏名および実際に刺激として使用した手書きのメッセージを非掲載とする配慮を行った。

### 3. 結果

収集したデータは一度 Excel に入力した後 JASP (Version 0.10.2) を用いて分析を行なった。また、有効と認められた回答 133 部のうち一部に欠損値が含まれるものに関しては、欠損している形容詞対の分析からのみ除外し、その他の形容詞対における回答は有効として処理を行なった。

はじめに、子どものメッセージが手書きであった場合と印刷された文字であった場合とで、そのメッセージに対して抱くイメージにどのような違いがあるかについて検討する

ため、それぞれのメッセージに対する各形容詞対の平均値をプロフィールに示した(図 1-3)。

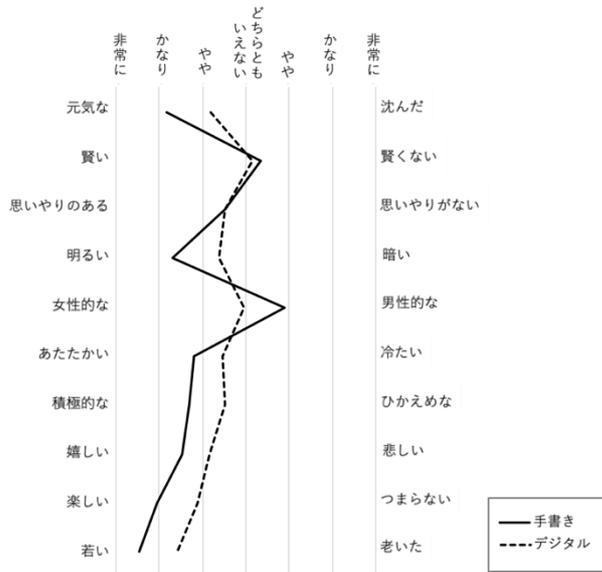


図 1. 刺激 1 に対するイメージのプロフィール

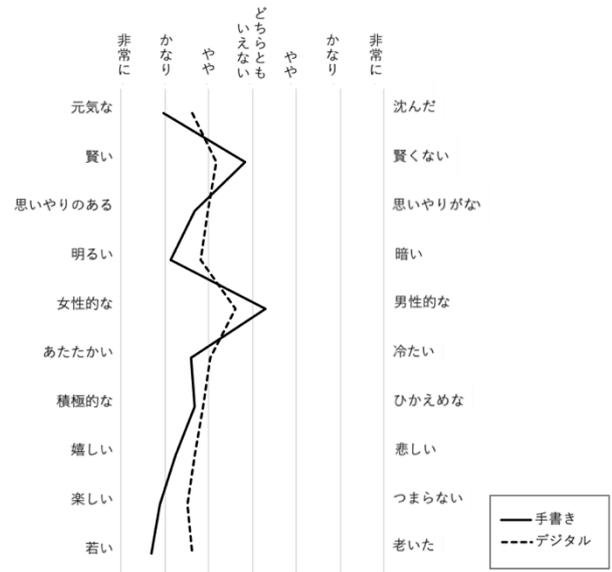


図 2. 刺激 2 に対するイメージのプロ

フィール

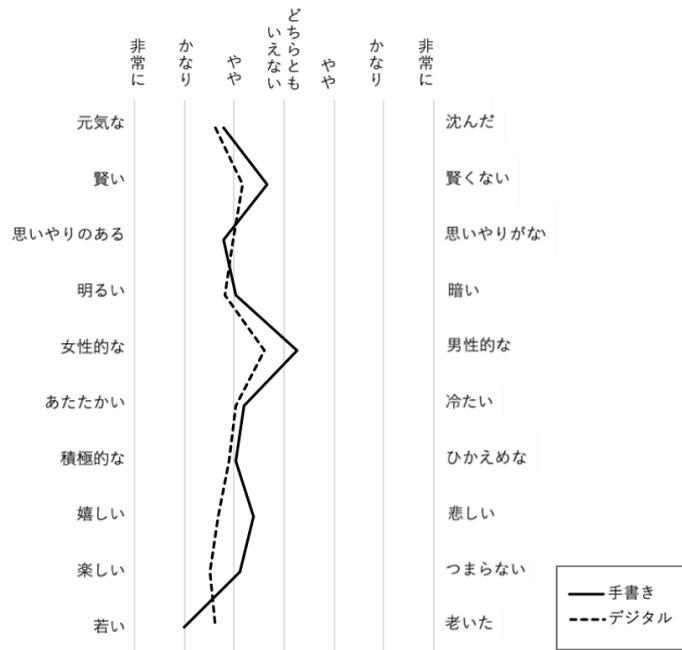


図 3. 刺激 3 に対するイメージのプロフィール

次に、メッセージが「手書き」であった場合と「デジタル文字」であった場合のイメージの違いについて、対応のない  $t$  検定を用いて 2 群の平均値差を検定した (表 2-4)。刺激 1 に関しては「賢い-賢くない」「思いやりのある-思いやりがない」の項目で有意差が認められなかったが、それ以外の 8 つの形容詞対において有意な差が認められた。また、有意差が認められた項目のうち「元気な-沈んだ」「明るい-暗い」「楽しい-つまらない」は

*Cohen's d* の値がいずれも 0.8 以上であったことから、手書き文字とデジタル文字とのイメージの平均値差が大きいと解釈された。またそれ以外で有意差が認められた項目も、*Cohen's d* の値がいずれも 0.5 以上であったことから、中程度の効果が認められたと解釈された。

表2. 刺激1の各形容詞対に対する対応のないt検定の結果

									95%CI	
			t	df	p	MD	SE Difference	Cohen's d	Lower	Upper
元気な	-	沈んだ	5.010	131	<.001	1.030	0.206	0.876	0.516	1.233
賢い	-	賢くない	-0.824	131	0.411	-0.178	0.216	-0.144	-0.487	0.199
思いやりのある	-	思いやりがない	0.057	131	0.955	0.011	0.187	0.010	-0.333	0.353
明るい	-	暗い	4.868	131	<.001	1.086	0.223	0.851	0.492	1.208
女性的な	-	男性的な	-3.912	131	<.001	-0.945	0.242	-0.684	-1.035	-0.330
あたたかい	-	冷たい	2.959	129	0.004	0.671	0.227	0.521	0.169	0.870
積極的な	-	ひかえめな	3.649	131	<.001	0.824	0.226	0.638	0.286	0.988
嬉しい	-	悲しい	2.881	131	0.005	0.635	0.221	0.504	0.155	0.851
楽しい	-	つまらない	4.633	130	<.001	0.917	0.198	0.814	0.454	1.171
若い	-	老いた	4.437	130	<.001	0.888	0.200	0.780	0.421	1.135

Note. Student's t-test.

表3. 刺激2の各形容詞対に対する対応のないt検定の結果

									95%CI	
			t	df	p	MD	SE Difference	Cohen's d	Lower	Upper
元気な	-	沈んだ	3.9	130	<.001	0.654	0.168	0.685	0.33	1.038
賢い	-	賢くない	-2.805	130	0.006	-0.665	0.237	-0.493	-0.842	-0.142
思いやりのある	-	思いやりがない	1.613	130	0.109	0.307	0.190	0.283	-0.063	0.628
明るい	-	暗い	3.694	131	<.001	0.664	0.180	0.646	0.293	0.996
女性的な	-	男性的な	-3.193	131	0.002	-0.703	0.220	-0.558	-0.907	-0.208
あたたかい	-	冷たい	2.442	131	0.016	0.448	0.183	0.427	0.080	0.773
積極的な	-	ひかえめな	0.917	131	0.361	0.199	0.217	0.160	-0.183	0.503
嬉しい	-	悲しい	2.149	131	0.033	0.419	0.195	0.376	0.029	0.721
楽しい	-	つまらない	3.481	131	<.001	0.624	0.179	0.609	0.257	0.958
若い	-	老いた	4.573	131	<.001	0.914	0.200	0.800	0.442	1.154

Note. Student's t-test.

表4. 刺激3の各形容詞対に対する対応のないt検定の結果

									95%CI	
			t	df	p	MD	SE Difference	Cohen's d	Lower	Upper
元気な	-	沈んだ	-0.837	129	0.404	-0.156	0.187	-0.148	-0.493	0.199
賢い	-	賢くない	-2.06	129	0.041	-0.473	0.230	-0.363	-0.711	-0.014
思いやりのある	-	思いやりがない	0.992	130	0.323	0.212	0.214	0.174	-0.171	0.518
明るい	-	暗い	-0.984	130	0.327	-0.217	0.220	-0.173	-0.517	0.172
女性的な	-	男性的な	-2.761	129	0.007	-0.657	0.238	-0.486	-0.835	-0.135
あたたかい	-	冷たい	-0.739	130	0.461	-0.155	0.209	-0.13	-0.473	0.215
積極的な	-	ひかえめな	-0.693	130	0.490	-0.148	0.213	-0.122	-0.465	0.223
嬉しい	-	悲しい	-3.648	130	<.001	-0.719	0.197	-0.64	-0.991	-0.286
楽しい	-	つまらない	-2.942	130	0.004	-0.604	0.205	-0.516	-0.864	-0.166
若い	-	老いた	2.971	130	0.004	0.634	0.213	0.521	0.171	0.870

Note. Student's t-test.

手書きのメッセージとデジタル化されたメッセージのイメージの内容を比較すると、どちらも全体的な傾向としてはポジティブなイメージが形成されていたものの、手書きの文字の方が、「元気な」「明るい」「あたたかい」「積極的な」「若い」における得点が高かつ

たほか、「嬉しい」「楽しい」といった書き手の感情に対するイメージの得点も高いなど、デジタル化されたメッセージと比較して全体的によりポジティブな印象が形成される傾向があることが明らかとなった。また、メッセージが男性的か女性的かということに関しては、デジタル化された刺激 1 のメッセージに対しては「どちらともいえない」という印象が形成されていたのに対し、手書きのメッセージに対してはやや「男性的な」イメージが形成されていたことから、メッセージが手書きである場合、そのメッセージの文字の形態からメッセージの発信者の性別に対して判断が下されやすくなっていた可能性が示唆された。

刺激 2 に関しては「思いやりのある-思いやりがない」「積極的な-ひかえめな」を除いた 8 つの形容詞対において有意な差が認められた。ただし有意差が認められた項目のうち、「賢い-賢くない」「あたたかい-冷たい」「嬉しい-悲しい」は *Cohen's d* の値がいずれも 0.5 未満であったことから、平均値差は小さいと言える。その他の項目は中程度の効果であったが、「若い-老いた」の項目は *Cohen's d* の値が 0.8 以上であったことから、平均値差は大きいと解釈することができた。イメージの全体的な傾向は刺激 1 と類似しており、手書きのメッセージに対してもデジタル文字のメッセージに対しても、概ねポジティブなイメージが形成されていた。中でも、手書きの文字の方が、「元氣な」「明るい」「あたたかい」「積極的な」「若い」などの項目および「嬉しい」「楽しい」といった感情に対する項目の得点も高いなど、全体的によりポジティブな印象が形成される傾向が、刺激 1 の場合と同様に見受けられた。男性的か女性的かというイメージに関しては、デジタル化された刺激に対しては「どちらともいえない」という印象が形成されていたのに対し、手書きのメッセージに対してはやや「女性的な」イメージが形成されていた。

刺激 3 に関しては、「元氣な-沈んだ」「思いやりのある-思いやりがない」「明るい-暗い」「あたたかい-冷たい」「積極的な-ひかえめな」の形容詞対では有意な差が認められず、その他の 5 項目において有意な差が認められた。しかし効果量の値により「賢い-賢くない」「女性的な-男性的な」に関しては平均値差は小さく、その他 3 つの項目に関する平均値差はやや大きいと解釈された。メッセージの形態別にイメージの内容を比較すると、どちらも全体的な傾向としてはポジティブなイメージが形成されていたが、デジタル文字の方が「嬉しい」「楽しい」といった書き手の感情に対するイメージの得点が高いなど、手書きのメッセージと比較して全体的によりポジティブな印象が形成される傾向があったことが明らかとなった。

次に、子どもと触れ合う機会の有無によってメッセージに対して形成するイメージに差が見られるか否かを検討するため、「日常的に子どもと触れ合う機会」が「ある」と回答した 37 名と「ない」と回答した 95 名について対応のない *t* 検定を用いて 2 群の平均値差を検定した。その結果、3 種類のメッセージにおけるどの形容詞対においても、有意な差は見受けられなかった。

#### 4. 考察

本調査の目的は、メッセージに対するイメージが、メッセージの形態によってどのように異なってくるかを検討すること、および子どもと接する機会の有無がメッセージの読み取りや、抱くイメージにどのように影響を及ぼしているかについて検討することであった。まず、メッセージが手書きであった場合とデジタル化された文字であった場合とで、メッセージに対するイメージがどのように異なるかに関しては、いくつかの形容詞対で有意な差が見受けられたことから、メッセージの形態がメッセージに対するイメージの形成に影響を及ぼしている可能性が示唆された。ただし、手書きもしくはデジタルのどちらの形態の方がより子どもの心境や背景をイメージとして捉えることができるのかという点に関しては、刺激 1 および刺激 2 では手書きのメッセージの方がよりポジティブなイメージが形成されていたのに対し、刺激 3 ではデジタル文字のメッセージの方がポジティブなイメージが形成されていたことから、一概には言えないことも明らかとなった。本論文では倫理的配慮の観点から実際の調査に用いた手書きメッセージを不掲載としたが、刺激 1 および刺激 2 の手書きメッセージと比べると、刺激 3 の手書きメッセージは文字の大きさが 3 分の 2 程度とやや小さめで行間もかなり狭いことから、デジタル文字化されたメッセージの方でややポジティブなイメージが形成されたのではないかと考えられる。こうしたことから、メッセージの受け取り手は、メッセージに書かれた内容そのものに加え、書かれた文字の丁寧さや形態の整い具合、線の濃さ、行や列の整い具合や行間の幅など、それ以外の視覚的要素によってメッセージに対するイメージを形成している可能性が示唆されたと言えるだろう。ただし、記述された内容以外のこうした情報は、子どもの心境を推測する際の重要な判断材料になる場合もあるが、「落ち込んでいる様子だったが、しっかりとした字で丁寧に書けているからそれほど心配いらないだろう」等、間違った方向に読み手の判断を歪ませてしまう可能性もあることは、十分注意する必要がある。

次に、子どもと接する機会の有無がメッセージの読み取りや、形成するイメージに影響を及ぼしているのではないかという仮説に関しては、今回の調査結果からは特に有意な差は見出されなかった。従来 of 学説では、子どもと接する機会や経験が子どもに対する共感性を高める可能性が示唆されていることから(佐々木ら,2010;長屋・小河,2015)、子どもとともに過ごす機会や経験は子どもの心境の読み取りに対して何らかのポジティブな影響を及ぼすことが考えられるが、それは目の前にいる子どもの様子を見る際に主に発揮される共感性であり、今回の調査で用いたような、文字や文章から子どもの心境や背景を読み取るための感受性は、子どもと接する機会を単に増やせば身につくというのではなく、それとは独立したまた別の訓練を必要とするものである可能性についても今後考えていく必要があるだろう。

今回は子どものメッセージを刺激とし、手書きの場合とデジタル化された文字とで比

較検討を行なったが、現在幼稚園や保育所、学校現場では ICT 化やペーパーレス化が急速に進んでおり、保護者とのやりとりに電子連絡帳が使用されたり、メールや LINE を用いて連絡事項をやりとりする機会が急増している。こうしたことから、今後は子どものメッセージだけでなく、保護者からのメッセージや、保育者や教師が発するメッセージが手書きの場合とそうでない場合とで、受け手に対してどのような影響を及ぼすかについて検討していくことも必要であるといえるだろう。

また、今回の調査は教職課程の学生および保育者養成課程の学生のみを対象としていたため、今後はそうした教育を受けていない学生や保護者もしくは保育者を対象とした調査も行い、立場や志および経験などの違いが、メッセージの読み取りにどのような影響を与えるのかについて検討していく必要がある。また、今回の調査はメッセージの形態とイメージの差異に焦点を当てたため、子どもの心境や背景を「正確に」把握しているかどうかについては検討を行わなかった。したがって今後は、メッセージを書いた本人の気持ちや背景にも焦点を当て、メッセージの受け取り手がメッセージの送り手の心境や背景をより正確に把握するための要素や要因について、子ども同士でメッセージをやりとりする場合、子どもから保護者へメッセージが出される場合、教師から保護者へメッセージを伝える場合、保育者から子どもへメッセージを送る場合など、子ども・保護者・保育者・教師の各組み合わせを想定しつつ、詳細に検討していくことが必要であると考えられる。また、SD 法を用いた調査の場合、因子分析によって因子構造を確認し、因子間の相関について検討するのが一般的であるが、今回の調査ではイメージのプロフィールにおける差を検討することに重点を置いたため、これらの分析および検討は行わなかった。今後、子どもの手書きのメッセージもしくはデジタル化されたメッセージに対するイメージの因子構造を分析し、項目間の相関について検討を行う際には、今回の調査で用いた形容詞の妥当性を十分に検討した上で新たな形容詞対を追加し、また調査協力者の人数を増やした上でこれらについて検討していく必要があると考えられる。

## 引用文献

- 井上正明・小林利宣 (1985) 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33(3), 253-260.
- 黒田 正典 (1980). 書の心理—筆跡心理学の発達と課題— 誠信書房
- 槇田 仁 (1983). SCT 筆跡による性格の診断 金子書房
- 槇田 仁・小谷津 孝明・伊藤 隆一・渡辺 利夫・平野 学 (1981). 筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究(1) 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 21, 85-95.
- 長屋 佐和子・小河 妙子 (2015). 保育養成課程学生の表情認知特性—心理学課程学生との比較による検討— 名古屋女子大学紀要, 61(人・社), 99-107.

- 西園 薫・無藤 隆 (1993). 筆跡と書字意識と性格の間の相互の関連の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, 505-505.
- Vine, I. (1974). Stereotypes in the judgement of personality from handwriting. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, 13, 61-64.
- 吉村 英 (1991). ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響(I) 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 753.
- 吉村 英 (1992). ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響(II) 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 539.
- 吉村 英 (1993a). ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響(III) 日本心理学会第 57 回大会発表論文集, 803.
- 吉村 英 (1993b). 手書きとワープロのあいだ. 川浦康至(編)メディアコミュニケーション, 現代のエスプリ, No. 306 (pp. 170-179) 至文堂